



角川文庫
— 698 —

母の幹滋將少

一郎潤崎谷



角川書店



母の幹滋將少

一篇他

郎一潤崎谷

昭和二十八年十月十五日 初版發行
昭和四十五年二月二十日 三十五版發行

定價は、帶・カバー
に明記してあります

著作者

林・芙美子
はやし ふみこ

發行者

角川源義

印刷者

中内佐光
東京都千代田區飯田橋一ノ二

庫 文 川 角
し め

發行所

東京都千代田區富士見二ノ十三
①一〇二 ②東京一九五二〇八

株式會社 角川書店
電話東京(265)三三(大代表)

落丁・亂丁本はお取替え致します

Printed in Japan

曉印刷・多摩文庫

目次

少將滋幹の母

五

乳野物語

一五二

解説

正宗白鳥

二〇一

さし繪 小倉遊龜

少將滋幹の母

谷崎潤一郎

題簽 安田靫彦

少將滋幹しげもとの母

その一

此の物語はあの名高い色好みの平中へいちゆうのことから始まる。

源氏物語末摘花すゑつむはなの巻の終りの方に、「いといとほしと思して、寄りて御硯おんすゐりの瓶の水に陸奥紙みちのくがみをぬらしてのごひ給へば、平中がやうに色どり添へ給ふな、赤からんはあへなんと戯れ給ふ云々」とある。これは源氏がわざと自分の鼻のあたまへ紅を塗つて、いくら拭いても取れないふりをして見せるので、當時十一歳の紫の上が氣を揉んで、紙を濡らして手づから源氏の鼻のあたまを拭いてやらうとする時に、「平中のやうに墨を塗られたら困りますよ、赤いのはまだ我慢しますが」と、源氏が冗談を云ふのである。源氏物語の古い注釋書の一つである河海抄に、昔、平中が或る女のもとへ行つて泣く眞似をしたが、巧い工合に涙が出ないので、あり合ふ硯の水指をそつとふところに入れて眼のふちを濡らしたのを、女が心づいて、水指の中へ墨を磨つて入れておいた、平中はさうとは知らず、その墨の水で眼を濡らしたので、女が平中に鏡を示して、「われにこそつらさは君が見すれども人にすみつく顔のけしきよ」と詠んだ故事があつて、源氏の言葉はそれにもと

づく由が記してある。河海抄は此の故事を今昔物語から引用し、「大和物語にも此事あり」と云つてゐるけれども、現存の今昔や大和物語には載つてゐない。が、源氏にこんな冗談を云はせてゐるのを見ると、此の平中の墨塗りの話は好色漢の失敗談として、既に紫式部の時代に一般に流布してゐたのであらう。

平中は古今集その他の勅撰集に多くの和歌を遺してゐるし、系圖も一往明かであるし、その頃のいろ／＼の物語に現れて來るので、實在した人物であることは紛れもないが、死んだのは延長元年とも六年とも云つて確かでなく、生れた年は何の書にも記してない。今昔物語には、「兵衛佐平定文と云ふ人ありけり、字をば平中とぞ云ひける、御子の孫にて賤しからぬ人なり、そのころの色好みにて人の妻、娘、宮仕人、見ぬは少くなんありける」と云ひ、又別の所で、「品も賤しからず、形有様も美しかりけり、けはひなんども物云ひもをかしかりければ、そのころ此の平中に勝れたる者世になかりけり、かゝる者なれば、人の妻、娘、いかに況んや宮仕人は此の平中に物云はれぬはなくぞありける」とも云つてあるが、こゝに記す通りその本名は平定文（或は貞文）で、桓武天皇の孫の茂世王の孫に當り、右近中將從四位上平好風の男である。平中と云ふのは、三人兄弟の中の二番目の子息であるからとも云ひ、字を仲と云つたからとも云ふ説があつて、平仲と書いてある例も多い。（弄花抄に依ればヘイチユウのチュウは濁りて讀むべしとある）蓋し平中とは、なほ在原業平のことを在五中將と呼んだ如きであらうか。

さう云へば業平と平中とは、共に皇族の出である點、平安朝初期の生れである點、美男子で好色

家であつた點、歌が上手で、前者が三十六歌仙の一人、後者が後六々選の一人である點、前者に伊勢物語があるやうに、後者にも平中物語とか平中日記とか云ふものがある點等でよく似てゐる。たゞ平中は業平よりも時代がやゝ下つてをり、今の墨塗りの話や、本院の侍従に鬪弄された話などから想像すると、業平と違つていくらか三枚目的なところがあつたやうな氣がする。平中日記を見ても、その内容は必ずしも花々しい戀愛談ではなく、相手に逃げられたり、體よく捌かれたり、とゞのつまりは「物も云はでやみにけり」とか、「煩はしとて男やみにけり」とか云ふ風な終りを告げてゐる挿話が随分ある。又七條の后きさひの宮の女房武藏との關係のやうに、たま／＼望みが叶つたかと思へば、その翌日から公用で四五日京都を離れるやうなことになる、而も不覺にも女に事情を知らしてやるのを怠つたので、女はたよりのないのを歎いて尼になつてしまつたと云ふやうな、そゝつかしい話などもある。

ところで、平中が數ある女たちの中で、一番うつゝを抜かして戀ひこがれ、おまけに散々な目に遭はされて、最後には命までも落すやうなことになるた相手は、侍従の君、——世に謂ふ本院の侍従であつた。

此の婦人は、左大臣藤原時平の邸に宮仕へしてゐた女房であるが、時平のことを本院の左大臣と呼ぶところから、此の女のことを本院の侍従と呼ぶ。その頃平中の官はわづかに兵衛佐ひやうゐのすけであつた。彼は血統や家柄はよかつたけれども、官職は低かつたのであつた。それに何分なまけ者で、「宮仕へをば苦しき事にして、たゞ逍遙せうようをのみして」と日記にあるから、要するに役所勤めなんか嫌ひ

で、のらりくらりしてゐたのであらう。帝はそれをお憎みになつて、懲らしめのために一時免官せしめられたことなどもあつた。尤も一説に、彼が免官になつたのは、彼よりも官職の上の或る男が彼と女を争つたところ、女がその男を嫌つて平中の方へ靡いたので、戀の競争に破れた男が平中を恨み、彼のことを何や彼やと朝廷に讒言ざんげんしたからであるとも云ふ。古今集卷十八雜の下所載「憂き世にはかどさせりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする」と云ふ歌は、「つかさの解けて侍りける時よめる」と云ふ詞書ことばがきの通り、その折彼が出家遁世の念を起して詠んだのであるが、帝の御母后おんはきさきのもとにも馴染なじみの女房があつたので、「なり果てむ身をまつ山の時鳥いまは限りとなき隠れなむ」と云ふ歌をその女の所へ送つて、一方では御母后に運動をし、一方では父の好風が帝に哀訴したので、間もなく再び官を賜はつたのであつた。

勤めぎらひの平中は、宮中への出仕は怠りがちであつたらしいが、本院の左大臣のもとへは始終御機嫌伺ひに行つた。本院と云ふのは、中御門の北、堀川の東一丁の所にあつた時平の居館の名で、當時時平は故關白太政大臣基經、——昭宣公せうせんこうの嫡男として、時の帝醍醐帝の皇后穩子の兄

として、權威並びない地位にあつた。時平（これはトキヒラが本當であらうが、古くからの云ひ習はしに従つて矢張シイと呼ぶことにしよう）が左大臣になつたのは昌泰二年、二十九歳の時であつて、初めの二三年の間は右大臣に菅原道眞が控へてゐたために多少牽制もされたけれども、昌泰四年の正月にその政敵を陥れることに成功してからは、名實共に天下の一の人であつた。そして此の物語の時代にも、まだ三十を三つか四つ越したぐらゐに過ぎなかつた。今昔物語には、

此の大臣もまた「形美麗に有様いみじきこと限りなし」「大臣のおん形音氣はひたきもの薫の香よりはじめて世に似ずいみじきを云々」と記してゐるので、われ／＼は富貴と權勢と美貌と若さとに恵まれた驕慢けうまんな貴公子を、直ちに眼前に描くことが出来る。從來藤原時平と云ふと、あの車曳くるまびきの舞臺に出る公卿くけい惡の標本のやうな青隈あせくまの顔を想ひ浮かべがちで、何となく奸佞かんねい邪智じやちな人物のやうに考へられて來たけれども、それは世人が道眞に同情する餘りさうなつたので、多分實際はそれ程の惡黨ではなかつたであらう。嘗て高山樗牛ちやうぶは菅公論を著はして、道眞が彼を登用して藤原氏の專横を抑へようとし給うた宇多上皇の優渥いうあくな寄託に背そむいたのを批難し、菅公の如きは意氣地なしの泣きみそ詩人で、政治家でも何でもないと云つたことがあるが、さう云ふ點では時平の方が却つて政治的實行力に富んでゐたかも知れない。大鏡は時平を悪くばかりは云はず、愛すべき點があつたことをも傳へてゐる中に、可笑をかしいことがあると直ぐ笑ひ出して笑ひが止まらない癖があつたと云ふが如きは、無邪氣で明朗瀟灑な一面があつたことを證するに足りるのであるが、その一例として滑稽な逸話がある。まだ道眞が朝にあつて、時平と二人で政務を見てゐた頃のこと、いつも時平がひとりで非道に事を處理して、道眞にくちばし嘴くちばしを入れさせないので、某と云ふ記録係の屬官が一計を案じ、或る日文案を文挾ふださみに挟んで左大臣の前に捧げて行き、それを時平に渡さうとするはずみにわざと音高く放屁をした。時平は途端に噴き出してわッは／＼腹を抱へ始めたが、いつ迄たつても笑ひやまず、體がふるへてその文案を受取ることが出来ないのです、その間に道眞が悠々と事務を執り、思ひのまゝに裁斷を下した、と云ふのである。

時平は又なか／＼勇氣があつた。道眞の死後、その靈が化して雷神となつて朝臣に讐をすると信ぜられてゐた時分、或る日清涼殿に落雷して滿廷の公卿たちが顔色を失つた折に、時平は凜然と太刀を引き抜いて大空を睨み、「あなたは生きてをられた時にも私の次の位だつたではないか、たとひ神になられても、此の世へ來られたら私を尊敬なさるのが當然ですぞ」と叱咤したので、その威勢を恐れたかのやうに、雷鳴が一時靜かになつた。されば大鏡の作者も、いろ／＼悪い事をした大臣ではあつたけれども「大和魂などはいみじくおはしましたるものを」と云つてゐる。

かう云ふと、時平はたゞ向う見ずの、お坊ちやん育ちの餓鬼大將のやうにも取れるが、案外さうでない一面もあつて、醍醐帝と此の大臣とが密かに謀つて世間の奢りを戒めたと云ふ話なども傳はつてゐる。それは或る時、時平が帝の定め給うた制を破つた華美な裝束をして參内したのを、帝が小薮の隙間から御覽になつて急に機嫌を損ぜられ、職事を召されて、「近頃過差の取締がきびしいのに、左大臣たる者がいかに一人であるとは云へ、殊のほかきらびやかな裝ひをして參るとは怪しからぬ、早々退出するやうに申し付けよ」と仰せられたので、職事はどうなることやらと案じながら、こは／＼仰せの趣を傳へると、時平は恐懼措く所を知らず、従者共に先を追はせることをも禁じ、慌てふためいて退出して、以後一箇月ばかりは堅く居館の門を閉ぢて引籠つてゐた。たま／＼人が訪ねて來ても、「お上の御勘當が重いので」と云つて面接せず、御簾の外にも出なかつたので、漸く此の事が評判になり、世人が奢りを慎しむやうになつたが、これは豫め時平が帝としめし合はせてしたことなのであつた。

平中が此の時平のところへしばく伺候したのは、權門に媚びて出世の緒いとぐちを擱つかまうと云ふ世間並な下心もないことはなかつたであらうが、一つには此の大臣と兵衛佐とは話の馬が合ふせるでもあつた。二人は官職や位階から云へば大きい隔たりがあるけれども、系圖や家柄を論ずれば平中も遜色はないのだし、趣味や教養も同等であるし、どちらも女好きな貴族の美男子なのである。従つて、二人が常にどんなことを面白がつてしやべり合つてゐたか、大凡そ見當がつくのであるが、でも平中は、左大臣のお相手をするのが唯一の目的で此の邸へ來るのではなかつた。いつても彼は夜が更ふけるまで御前で話し込んでから、頃あひを測つて暇を告げるのであるが、そのまゝ眞つ直ぐ自分の館へ歸ることなどはめつたになかつた。大臣の前は歸つた體ていにして置いて、實はそうつと女房たちの局つばねの方へ忍んで行き、侍従の君のゐるあたりをうろくするのが例になつてゐて、ほんたうは此の方が目的なのであつた。

しかし甚だ笑止なことに、平中は去年以來忍び歩きを繰り返して、或る時はこゝぞと思ふ遣戸やりどの外で息を凝らしてみたり、勾欄こうらんのほとりにゐたんでみたり、根氣よく機會をうかゞつてゐるのであるが、いつもの彼にも似ず、今度ばかりは運が悪くて、未だにその人の心を動かすことが出來ないのみか、世に稀な美女であると噂の高いその容姿を、垣間かひま見たことすらないのであつた。これ一つには、運が悪いだけではなく、何故か相手なによぬの人が故意に平中に遇ふことを避けてゐるらしいからなので、そのために平中は一層懊じれてゐた。かう云ふ場合、召使はれてゐる女童わらわなどを手馴なづけて文の取次をして貰ふのが常套手段じやうたうしゅんで、もちろんその邊にぬかりがあるのでなかつたが、

それも、今日までに二三度持たせて遣つたのに、全然手答へがないのであつた。いつも平中は女童を掴まへて、「たしかに渡してくれたかね」と、しつこく念を押すのであるが、「えゝ、お渡しゝたことはしたんですけれど、………」と、女童は口ごもりながら氣の毒さうに平中の顔を見るのである。

「お受け取りにはなつたんだね」

「えゝ、たしかにお取りになりましたわ」

「是非御返事を戴きたいと、云つてくれたぐらうね」

「それも、さう申上げたんですけれど………」

「さうしたら？」

「何とも仰つしやらないんですの」

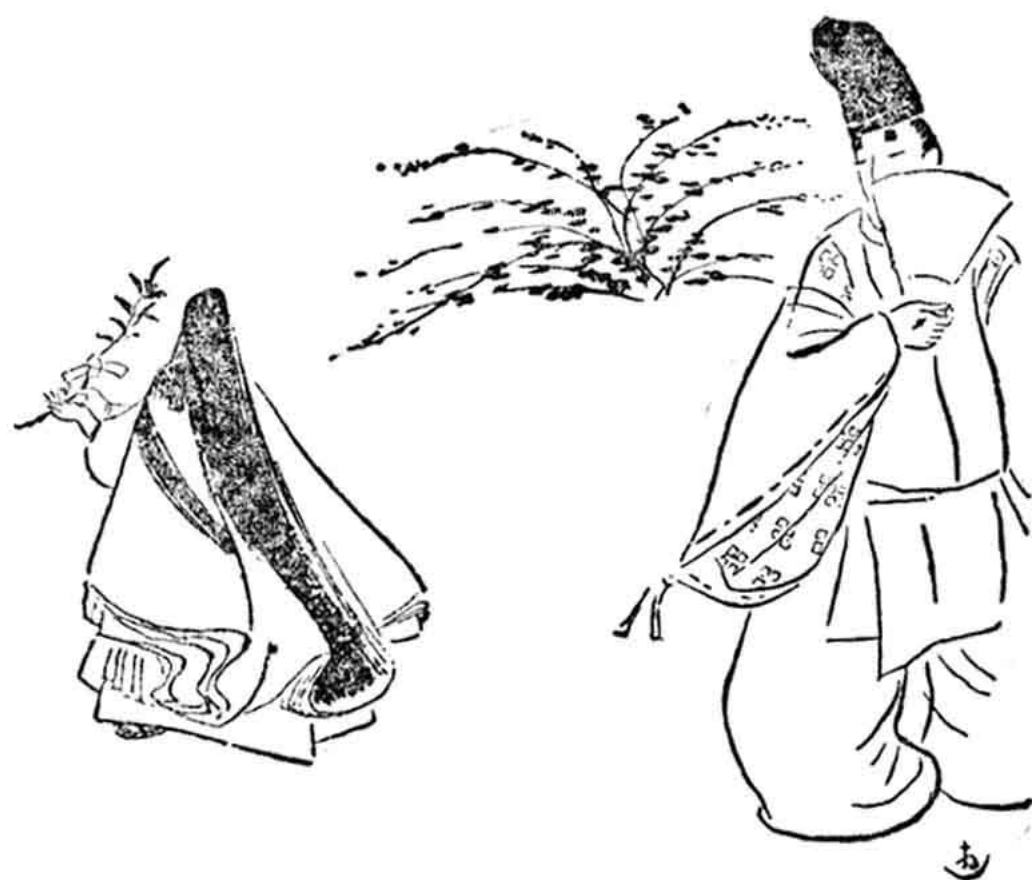
「でも、お読みにはなつたのだらうか」

「えゝ、多分ね、………」

と、平中が問ひ詰めれば問ひ詰めるほど、女童はいよゝゝ當惑するのである。

一度などはこんなことがあつた。

例に依つてこまゝと思ひのたけを書き綴つたあとに、せめて私はあなたが此の文を御覽下すつたかどうか、それだけでも知りたいのです、決してねんごろな御言葉をとは申しません、御覽になつたのなら、見たと云ふ二文字だけの御返事でもお寄越しになつて下さい、と、泣かんばかり



の口調でしたゝめたのを持たせてやると、女童はつひぞないことにニコ／＼しながら戻つて来て、「今日は御返事がありましたのよ」

と、一通の文を渡した。平中が胸をときめかしつゝ押し戴いて受け取ったことは云ふ迄もないが、急いで封を開いて見ると、小さな紙きれが一つ這入つてゐるだけであつた。なほよく見ると、「見たと云ふ二文字だけの御返事でもお寄越しになつて下さい」と書いてやつた、さつきの彼の文の中の「見た」と云ふ二字のところを破いて入れてあるのであつた。

これにはさしもの平中も開いた口が塞がらなかつた。彼も今まで數々の女に戀をしかけたが、こんな意地の悪い、皮肉な相手に懸つたことはなかつた。かりにも此方は美男の聞えの隠れもない平中である。大概な女は彼だと分れば譯もなく靡なびいてしまふのが常で、今度のやうに手きびしい扱ひをした者は一人もなかつた。で、いきなりピシヤリと横面を張られたやうな氣がして、さすがにそのあと暫くは寄り着かうとしなかつた。

それから二三箇月の間と云ふものは、女の所に用がないとなると、現金なもので、左大臣への御機嫌伺ひも自然怠りがちにしてゐた。たまには伺候することもあつたが、歸りにいつもの局へは間違つても足を向けず、そつちは鬼門だと、自分で自分に云ひ聞かして、すうつと出て来るやうにしてゐた。と、その後又幾月か過ぎて、或る五月雨さみだれの降る晩であつた。久振ひさしよりに御前で夜を更かしてから出て來ると、宵のうちは入梅らしくしよ／＼降つてゐた雨が、俄にかに大降りに降り出したので、此の雨を衝ついて自分の家まで歸るのはえらく煩はしい氣がしたが、その時ふつと、か